

心の散歩道

『教えの縦系 心に織れば 結ぶご縁は 横の系』

お経といえば、仏さまの教えのこと。でも、〈経(けい)〉という字を辞書で引くと、ちっと違った意味に出会います。それは〈タテ糸〉という意味、布地のもとになるタテ糸のことです。ヨコ糸は〈緯(い)〉といいます。今も地球上の位置を示すのに、経度・緯度という用語に、その意味が使われています。さて、機(はた)を織るには、まずこのタテ糸を張り、次ぎにヨコ糸を織り込んでいきます。このことからタテ糸は、つねにまっすぐに通った道、即ち『不変の真理』という意味に転じて、教えをあらわす書物を〈経〉と呼ぶようになりました。

経典が組織的に編まれたのは、釈尊の入滅後間もない時期（今から約 2500 年前）釈尊が悟りを開いてから亡くなるまで四十五年もの間、説き続けた教えが散逸するのを懸念した高弟たちが、摩訶迦葉（まかかしょう）尊者を中心に協議し、インド中から五百人もの阿羅漢（あらかん・「聖者」）たちが、マガダ国の首都ラージャガハ（王舎城）に集まり、釈迦の教説「法と律」を正しく記録することの大切さを仲間の比丘たちに訴え、編纂されました。このときの編集会議を「第一結集（けつじゅう）」といい、当初は文章化されず口伝されていた。その後数百年間にわたり何度も結集が行われて、現在の経典ができましたが、仏さまの教えは、宇宙の真理をつづったタテ糸であるともいえます。

また、弘法大師さまは、「生まれ生まれて生まれて生のはじめに暗く、死に死に死に死んで死の終わりに冥(くら)し」と説かれています。いのちは、悠久の昔から永遠と続いているものであり、また、子孫へと続いていくものである。行為も同じで、今行った行為・言葉が因果として子孫に伝わるものであり、生きる真理を知って今を生きなければならぬと説かれています。

心に仏さまとご縁を結び、それぞれの人生模様をヨコ糸として織りこむのは、今生きている私たちではないでしょうか。

